第503号 昭和62年5月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1987年（昭和62年）
5月号（No. 503）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

三国合同登山
—その後の経過—　大塚博美……(1)
海外の山……(2)
蔵書のゆくえ（上）　近藤信行……(3)
追悼……(3)
「故中屋健式会員を偲ぶ」
「牧野四子吉氏を悼む」
図書紹介……(4)
「シンポジウムネパール 1985」
「PERU ANDES '84」
エーデルワイスにひとこと
久合田　弘……(5)
東西南北……(6)
「チョーチンと針」「新入会員オリエンテーションに参加して」
「故片山氏の遺灰ヒマラヤへ」
「500号座談会記事を読んで」
「山岳写真の源流展開催」
報告……(8)
自然保護委，高所登山委，青懇委
図書受入報告　図書委員会……(9)
会務報告・ルーム日誌・会員異動
……(10)，(11)
お知らせ……(11)

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

三国合同登山

—その後の経過—

大塚博美

隊員数の決定

去る二月二十四日、北京において、この合同登山についての議定書の調印が中国・ネパールの政府関係首脳立会いのもとで、正式に調印され、組織の基盤が確定されました。

この内容については、読売新聞紙上で報道されましたが、会員の皆様には、既に昨年の会報十二月号（498号）で日本隊の編成についての概要のみご報告しておりますので、議定書で決められました日本登山隊の幹部と隊員数について、お知らせいたします。

日本側総隊長・今西寿雄（JAC会長）、副総隊長・大塚博美（同副会長）▽北側日本隊統括隊長・斉藤惇生（同京都支部長）▽北側登山隊長・橋本清（同常務理事）▽テレビ隊々長・岩下莞爾（日本テレビプロデューサー）、▽南側登山隊長・湯浅道男（同東海支部）▽北側登はん隊長・重広恒夫（同関西支部）▽南側同・磯野剛太（同会員）。

日本側隊員、▽登はん隊員＝北・南、計二十八名▽ベースキャンプ要員＝通訳二、気象四、通信一、医療四、計十一名▽テレビ隊員＝三十名▽報道隊員＝九名。

即ち、登山隊長以下BC要員を含め日本隊員数は四十三名、TV・報道が三十九名で、総数八十二名。三国合同登山隊員総数は南北併せ、二五二名となります。

登山委員会と募金委員会の発足

北京での三国合同登山議定書の調印を終え、四月三日両委員会を開催した。

『登山委員会のメンバー』は、▽顧問＝桜内義雄（衆議院議員・国会議員スポーツ連盟会長・登山隊総顧問）、橋本龍太郎（衆議院議員・運輸大臣・日本山岳会々員・登山隊名誉総隊長）、柳川覚治（参議院議員）、小林与三次（読売新聞社々長・日本テレビ放送網会長・登山隊後援総顧問）、高木盛久（日本テレビ放送網社長）、務臺光雄（読売新聞社名誉会長）、早川種三（日本山岳会名誉会員）▽委員長＝今西寿雄（日本山岳会々長・登山隊総隊長）▽委員＝爲郷恒淳（読売新聞社副社長）、石塚彰（日本山岳協会副会長—関西）、漆戸靖治（日本テレビ取締役編成局長）、大塚博美（日本山岳会副会長・登山隊副総隊長）、鎌田久（日本山岳協会々長）、川上末太郎（読売新聞社事業本部長）、北川信（日本テレビ取締役芸能局長）、斉藤一男（日本山岳協会副会長—関東）、沢村幸蔵（前同—事務）、西堀栄三郎（日本山岳会名誉会員）、水上健也（読売新聞社専務取締役編集局長）、山田二郎（日本山岳会副会長）、渡辺兵力（日本山岳会名誉会員）。（以上アイウエオ順）

○議事概要—▽挨拶、今西委員長、後援社読売新聞社小林社長、日本テレビ高木社長、顧問柳川代議士。▽議長選出、今西委員長を議長として議題に入り、大塚実行委員長の説明により議事を進める。▽経過報告・委員会の性格、▽登山計画、▽登山予算案、▽募金計画（免税寄付）、▽計画準備予定、▽その他質疑応答。各議題は承認され終了。（四月三日午後四・〇〇～五・〇〇、日本テレビにて）

予算の収支と募金は次の通りです。

▽予算・収入　後援二社より援助金、二億四、三〇〇万円、隊員個人負担、九〇〇万円、募金七、〇〇〇万円、雑収九〇万円、合計三億二、二九〇万円。▽支出　日本側担当南北BC以上の総経費一億四、一〇二万円、中国・ネパール登山援助費九、六〇〇万円、国内事務費二、一五五万円、対外交渉費一、八九三万円、予備費四、五四〇万円、合計三億二、二九〇万円。▽募金　日本体育協会のスポーツ免税寄付枠に対し、日本山岳協会との共催事業として申請済（内諾）。▽免税寄付依頼先　各企業連合、協会—銀行・電気・医薬・自動車・私鉄・証券・建設・百貨店・その他—。▽会員募金　JAC会員、五〇〇万円（一口五、〇〇〇円）

『募金委員会のメンバー』は、▽顧問＝桜内義雄、橋本龍太郎、柳川覚治、早川種三（以上四氏、前出）▽委員長＝西堀栄三郎（JAC・元会長）▽副委員長＝今西寿雄（同会長）、大塚博美（同副会長）▽常任委員＝飯野亨（同評議員）、吉田宏（同評議員・関東地区担当）、平林克敏（関西地区）、尾上昇（東海支部長・東海地区）▽委員＝名誉会員▽槇有恒、辻荘一、三田幸夫、今西錦司、吉沢一郎、後藤幹次、藤島玄、佐々保雄、島田巽、堀田弥一、中村テル、麻生武治、野口末延、竹節作太、小原勝郎、高山忠四朗、田口

お知らせ電話 234六六五九

二郎、谷口現吉、浜野正男、望月達夫、織内信彦、渡辺兵力、川森左智子。＜評議員＞松田雄一、中村純二、宮下秀樹、山口節子、村山雅美、近藤信行、大森薫雄、小西政継、伊藤紀克、越智英夫、宗實慶子、安間荘、中世古隆司、佐々木豊喜、田中弘美。＜支部長＞橋本誠二、佐藤敏彦、岡田光行、村上勝太郎、庄司駒男、中島正夫、佐藤一栄、蒲生明登、大沢伊三郎、山本朋三郎、松井辰弥、若林啓之助、増江俊三、阿部和行、港叶、末松大助、野口秋人、西沢健一、魚本定良、斉藤惇生。＜理事＞山田二郎、鴫原啓佑、大橋晋、松永敏郎、梅野淑子、浜口欣一、長谷川良典、平井吉夫、絹川祥夫、村木冨士、岡沢祐吉、高遠宏、新井陽一郎、鈴木郭之、大森久雄、太田晃介、関塚貞亨、村木潤次郎、浜野吉生、山野井武夫、湯浅道男、重広恒夫、柳沢昭夫。

▽事務局　橋本清、神崎忠男、西村政晃（会計）、伊丹紹泰（総務）、磯野剛太（庶務）。

○議事概要―▽挨拶、今西会長。▽西堀委員長挨拶―今回の登山の意義と募金の趣旨について―。▽大塚副委員長より①登山計画、②登山予算案、③募金計画（免税寄付）、④計画準備予定の説明。▽その他質疑応答。各議題は承認されて終了。（四月三日、午後七・〇〇～八・三〇、私学会館にて）

西堀委員長の挨拶要旨は次の通り。

「このたびの計画は大変インターナショナルなものである。三国合同の性格は、各々が平等の原則に立って、協同で登山を行ない、中国、ネパールの両国もそれぞれの分担を責任をもって行なう。'80年のJACのチョモランマの時は中国登山協会の協力を得たが、今回は協同である。交差縦走という国境を越える点は、今回の登山のポイントで、二十一世紀には考えられるものであるが、重要な意義がある。別の面で、世界中のハイウエーを結ぶインターナショナルハイウエーの構想も話題となっており、国境の緩和ということは、やがてその時が来ると思う（日韓海底トンネルの話題にも触れられた）。また宇宙中継のTV放映による登山活動が各家庭の茶の間へ紹介されることで、登る側と中継するTV側、そして視聴者との結びつきを考えれば、国民の皆さんと一体となって行なわれる点で普段と異る特色があり、中・ネとの友好親善にも大いに寄与することと思う。JACの役割り分担、その責任は大であるが、JACにはそのキャリアがあり、登山の実際については、南・北の経験があるJACがリーダーシップをとらねばならない。登山経費の経済的な責任については、後援社の新聞・TVが援助を約束してくれ有難いことであるが、未知の分野、表面に

海外の山

歩くことの恐怖

「歩く」ことが、ちょっとしたブームだ。走るのではなく、歩く。例によってアメリカからの輸入品っぽい感じはあるが、若葉の季節、日本でも野に山に町に「ウォーキング」を楽しむ人々は、どっとふえている。

山形県出身の大場満郎の場合、歩くことは健康のため、とはとても言えない。グリーンランド西海岸縦断、北磁極往復などもっぱら北極圏での単独徒歩行に挑戦してきた三十四歳のこの冒険家は今度はカナダ、グリーンランドそれぞれの最北の村を結ぶ千五百キロの単独徒歩行を企て、ゴール間近に海に落ち、断念したのである。

オートバイで北極点到達を果たした風間深志が補給基地としたカナダ・北極圏のレゾリュートを大場もスタート地点とした。出発日も同じ三月七日。アザラシ肉など八十キロの食糧、装備を満載したそりをひきながら、カナダ最北の村、グリスフィヨルドに向かった。

最初の困難は、隣のデヴォン島で道を失ったことだった。北極圏の島々は山々が入り組んで意外に複雑な地形となっている所が多い。大場はレゾリュートに無線で連絡、予定していた補給フライトを繰り上げ、空から位置を確認してもらったうえ、ルートのはっきりわかる所までスノーモービルの誘導を受けた。

ガスで天地さえわからなくなってしまう、いわゆるホワイトアウト現象と深い雪。前回のグリーンランド徒歩行に較べ、はるかに難しかった、という。ともかくも三月二十八日にはグリスフィヨルドにたどりついた。

スミス海峡をへだてグリーンランドと対するサビーヌ岬に着いたのが四月十七日。めざすシオラパルク村まであと百七十キロほどだったが、幅四十キロの海峡は、しかしもう氷がゆるみはじめていた。それでも何とか渡りたい。薄い氷を避けるようにして慎重に足を運んだが、三百㍍ほど進んだ所で氷を踏み抜き、一気に胸まで水に浸かった。夢中でまわりの氷にしがみつくとその氷も割れてしまった。その時の恐怖感―。

「今思えばもう少し時機を早めてやるべきだった。氷があんなに薄くなってしまう前に」後で大場はそう反省していたが、無事生還できたのは奇跡に近い。

歩くことは、私達にとって最も基本的な行動なので、日本列島縦断とかアメリカ大陸横断なんていう試みはそう珍しくはない。前号のこの会報でも還暦を機に日本列島を縦断した中保の気合いのこもった報告が載っていた。しかし、大場の冒険のように凍結を前提に海峡を歩いて渡るとなると、気力、体力のほかに科学の裏付けが要る。氷の穴に落ち込んで助かったこの単独行者は、日頃の鍛練の成果に加え、よほど強運の持ち主であった。

「ウォーキング」ブームとは言え、ヘリコプターで山のてっぺんまで運ばれることの可能な近頃のスキー場はもちろん、ヒマラヤでさえ航空と車道の整備からかなり高所まで歩かずに行ける時代である。たとえば五千三百㍍のチョモランマのベース・キャンプまではジープであっさり行けるのだ。そんな時代にただ一人そりを曳いて氷海を歩き続けるひたむきさ。スマートさと無縁のふんばり精神は山の世界にも通じるものなのだろうが、氷の海に身体をはるのでは、ちょっと激し過ぎる。

（江本嘉伸）

出ないもの、三国の合同事業ともなると、及ばないものが出てくるものである。異質の協力には必要な資金も必要であるし、別な意味の資金も保有したい。経費が足りないからというのでは汚辱であると思う」、と概要、登山の意義、募金の趣旨を述べられ、委員各位、特に各支部の支援と協力を要望された。

隊員候補選考面接

事務局から、各支部長ならびに高所登山経験者に隊員登録名簿を送付し、推薦、自薦を依頼したところ、締切りの三月十五日に五十九通の名簿の登録があった。資料の整理、面接の日時の調整の上、四十一名の希望者の面接を次の通り行なった。

①四月四日（土）一二・〇〇～二〇・〇〇、神田橋登山事務局にて

▽面接立会者＝今西総隊長、大塚副隊長、斉藤北統括隊長、橋本・湯浅両隊長、重広・磯野両登はん隊長▽面接者二十四名

②四月五日（日）九・〇〇～一三・〇〇、▽面接者十七名

①②により、第一次選考者を三十六名とし、合同顔合せ、研修会を五月上旬に行なう予定。

蔵書のゆくえ（上）

―三人の図書委員長のこと―

近藤信行

先日、図書室所蔵の『高山深谷』をとりだしてみた。一昨年の夏、創立八十周年の展覧会に出品したとき以来の、ひさしぶりのあたたかな手ざわりを感じた。第一輯（明治四十三年）から第八輯（大正六年）まで、高野鷹蔵氏の手になったそれは、どれをとってみても気品があり、滋味ゆたかである。当の高野氏をはじめ辻村伊助、石崎光瑶、近藤茂吉、辻本満丸、三枝威之介、加山龍之助、武井真澄、高頭仁兵衛、河野齢蔵、志村烏嶺その他の方々の山の写真にはこころからなる自然への共感がこめられているし、一冊ごとに意匠を凝らしたところからは、山に登るものの芸術的な性情をあらためて教えられるのであった。

この貴重書をとりだしたというのは、理由があったからである。小学館で『日本写真全集』（全十二巻）という企画があって、その編集担当者から「自然と風景」の巻の相談をうけたとき、ふと『高山深谷』の所在をもらしたことがきっかけとなって、大橋晋君と私がその取材に立ち会うこととなっ

追悼

故中屋健弐会員を偲ぶ

渡辺兵力

去る三月二十八日、元副会長の中屋健弐会員（一二四七）が逝去された。中屋さんは大学入学の年に入会された（昭和五年）古い会員で、戦後間もなく松方さんや藤島さん達が山岳会の復興に努力された頃に会の監事を担当し、また昭和四十年代のほぼ十年間評議員、理事、副会長等を務めており、会務に大いに貢献された。その功で昭和五十八年には本会名誉会員に推薦された。

年次晩餐会で名誉会員としての挨拶のとき「私はたいした山登りをやっていないが、清水トンネルを歩いてくぐり抜けたことがありました」と一寸誇らし気に語っておられた。私は中屋さんの後輩で成蹊学園在学中に、共に何回も谷川連峯周辺を歩き廻っていたので、このトンネル抜けの件は先刻承知していたが、当時でもたしかに稀有な山旅の一駒であったといえよう。

中屋さんの本業は数少いアメリカ史の研究者であって、アメリカ社会の学問研究の第一人者である。東大の西洋史学科を卒業して、おそらく松方さんの紹介と思うが同盟通信社（現在共同通信）に入社した。すなわちジャーナリスト出身という毛色のかわった大学の先生であって、その活躍は到底象牙の塔のなかにおさまるものではなかった。日本人がアメリカの社会や文化を正確に知っていかねばならない時に、中屋さんを失ったことは大きな損失であるといえよう。

私はお呼びがなかったので噂しか知らないが、戦後間もなく赤倉を拠点にした中屋スキー学校を開設して、友人・知人の子弟を預り、十年近くの間、大いにスキー教育に努力されていたと聞いている。故成瀬岩雄会員の山登りの考え方に私淑しておられたから、中屋学校ではさぞや質実剛健の精神に土台をおいた厳しい教育がされていたと想像している。

益々国際化していく会の活動にとって中屋さんのような国際人の会員の知恵は貴重であった。早いご逝去が心から惜しまれてならない。

牧野四子吉氏を悼む

中村テル

地下鉄有楽町線の護国寺で降り、講談社の横の急な坂道を登り、右に東大病院分院をみながら左に折れた住宅街に牧野家の門があり、つるバラが沢山に這ったアーチの下をくぐると、お庭に出ます。なんとなく、若夫婦でも住んでいるかと思わせる温味のある雰囲気の平屋で、小じんまりしたお部屋が四つくらいあったように覚えています。

奥さまの文子様がご存命中は、彼女の執筆の妨げにならぬよう、静かにひとり絵筆をとっておられたようでした。特に、〆切日に追いたてられ、食事の時間も惜しむくらいに机に向かわれる文子さまのために、夜の食事のあと片付けはいつも牧野氏が全部なさるのが、いつの頃からか、ご夫婦間のきまりのようになっていました……。牧野氏はこうした奥様の思い出を私に語られる時、淋し気にほほえまれていました。

夫婦と言うきづなは何っちが偉いとか、賢いとか比較できるものではなく、英語のベターハーフが真にその間を言い表す最も適した表現かと考えられます。

山をきれいに ゴミは持ち帰ろう

た。編集委員の重森弘淹氏はこんな本があったのかと嘆声をあげたという。幕末の島津斉彬の「五月節句雛の陰画」から現代の地球観測衛星による写真までの長い歴史のなかで、『高山深谷』からは十三点（表紙二点をふくむ）が採用されたわけだが、日本の風景写真史のなかにこの手造り写真集が正しく位置づけられるのは、先輩たちの労にすこしは報いることができたかとおもう。同書に「山岳写真の八十年」を執筆した杉本誠氏は、高野鷹蔵について「千枚を越す印画を最良の調子に仕上げて後世に残した山岳写真の稀有のリーダー」と書いている。

この『高山深谷』についておもいおこすのは、小林義正氏のことである。小林さんは深田久弥氏のあとをうけて図書委員会の委員長をつとめられ、われわれ後進の指導にあたって下さった。しかし丸善を退社されてからは健康をそこない、惜しくも昭和五十年十二月十四日、亡くなられた。

図書委員会が翌年二月二十日、小林さん追悼の会を湯島のルームでひらいたとき、栄子夫人と御子息がお見え下さったのだが、そのときおもいがけぬ光景がみられた。参会者のうち数名の話がすんだところで、栄子夫人はおもむろに風呂敷包をあけて『高山深谷』全十冊をとりだし、これは故人の遺志ですと言って、会の図書室に寄贈して下さったのである。

「主人は息をひきとるまで、この本を枕許においていました」

こう話されるのをきいていて、私は眼頭があつくなった。それほどまで大切にしていたものを持参されるとは、たいへんなことだ。この高雅な写真集をまえにして、参会者はみなおなじおもいをいだいたにちがいない。小林さんは『続・山と書物』のなかで、『高山深谷』の、殊に第四輯から第八輯までの端本を蒐めることのむずかしさを書いていたが、その蒐集努力の成果である愛蔵品を図書室に与えてくれたのである。

私が小林義正さんにはじめてお目にかかったのは、昭和三十三年の夏のことである。たまたまなにかの所用で深田久弥氏のお宅へうかがっていたのだが、夕方になってちょっとビールを飲んだあと、深田さんの言うままに東松原界隈の散歩に出た。そのついでに二人は予告もなしに小林さんのお宅へ上りこんだのであった。

深田、小林という稀有の山岳書研究家はすぐさま本の話をはじめた。小林さんが最近手に入れたと言って、深田さんの第一著作『翌檜』（昭和八年、江川書房）をとりだすと、深田さんは父親に題字を書いてもらったことなど往時の思い出を語っていたが、かたわらでお二人の対話をきいていておもしろかったのは、蒐書の苦労話で

追悼

夫が妻より優れているとか、妻が夫を蔑ろにするというような言葉は、牧野ご夫妻には全然不要な表現で、出来る時には、お互いが、出来得る限りの手助けをするのをきまりにしておられたようでした。

もともと文子様との出逢いのきっかけは、彼女に植物の絵を画いてあげる仕事だったと聞いております。陰ながら彼女の能力を発揮させることに喜びを感じておられ、いつも、それとなく、彼女を指導することに夫としての誇りを持たれていたようでした。殊に海外委員会で文子様が伊太利の山旅の話をなさる時など、助言をしたり、静かに彼女の思い違いを訂正されたり、何事も彼女と一つになって、文字通りのベターハーフ振りを見せて下さいました。お互いに信頼と尊敬で結ばれる本当の夫婦の姿を私共に教えて下さいましたことを懐しく思い出し、心より牧野氏のご冥福をお祈り申します。

追悼

図書紹介

シンポジウム　ネパール（一九八五）

日本ネパール協会編

日本ネパール協会では毎年行なわれるネパール研究学会の記録を同会年報にだしておられる。一九八五年は研究学会とは別に日本山岳会との共催で「ヒマラヤの生態系と環境」と題するシンポジウムが同年十一月に開かれ、その時の講演、発言がこのシンポジウムネパールの第二部として掲載されている。日本山岳会科学研究委員会では一九八二年からほぼ毎年（一九八三年は雪と氷のシンポジウム）ヒマラヤの自然と環境をテーマとしたシンポジウムを川喜田二郎氏（日本ネパール協会会長、科学研究委員会委員）に企画をお願いして開いてきた。

毎年内容の充実したシンポジウムであったが、予稿集以外に記録が残らず残念であると思っていたが、一九八五年のシンポジウムの全記録が日本ネパール協会の春田俊郎氏のご配慮で、この年報第十四巻に掲載されたことは感謝にたえない。私も科学研究委員会委員の末席を汚しているので、この本の書評をする立場にはないが、あえてこの冊子の簡単な紹介をさせて頂きたい。

すでにこのシンポジウムの要約は会報「山」の一九八六年三月号に掲載されているので、重複を避け、当日の講師と演題を記すことにしたい。

川喜田二郎氏　環境保全、開発を念頭に置いた文化生態地域区分の必要性

沼田　眞氏　ヒマラヤの生態保全の問題点

中尾佐助氏　ヒマラヤの自然保護私見

渡辺　桂氏　ネパールの森林と林業

渡辺兵力氏　山岳「地域」の環境論的理解

なおシンポジウムには金子一夫駐ネ大使も出席され、示唆に富む問題提起をされている。

会員方の中にはここに記した演題をみられて、とりつき難いと感じられる向きもあるかもしれないが、内容はわかりやすく、具体的でむずかしい話ではない。

これからヒマラヤ地域に登山、トレッキングに行かれる方、山地の生態系、自然保護に関心をもたれる方を始め、広く会員方に読んで頂きたい本であ

ある。レア・ブックを手に入れたときのよろこびもさることながら、高価な買物をして、妻の眼をいかにごまかすかという女房籠落談であった。あのおだやかな小林さんも興に乗って自分の手口をしゃべりはじめるのだ。本を持って帰ってきて、玄関の横の茂みのなかに隠しておくんですね。それでオイ、帰ったよ、と何喰わぬ顔で家に入るんです。着物にきかえてから庭に出て、こっそりそれを書斎に運びこむんですよ。こんなふうに言って、小林さんは軽やかな笑みをうかべるのだった。

望月達夫氏をふくめた三人で「ヒマラヤ文献展覧会」（昭和三十四年六月、丸善）を開催したころ、深田さんは「学鐙」に「ヒマラヤ蔵書癖」という文章を書いて、名は出さなかったけれど、その小林さんの話をとりいれている。山の本好きたちの蒐書体験からはじまるのだが、家計を苦しめる彼らは、天下の蔵書家のような顔をしていても「打ちあけてみれば、皆いかにして女房をあやつるべきか、苦心サンタンしている哀れな亭主ども」だというのである。

深田さんに紹介されてから、私は小林さんにはずいぶんお世話になった。勤め先が丸善のちかくにあったので、ときおり伺っては近所の喫茶店でお話をきいたが、小林さんはいつも謙虚で、そして控え目に山の本の楽しみを諄々と語られるのであった。それだけにずっしりとこちらの胸にひびくものがあった。

小林さんが図書委員長になられてから、私たちの周辺はかなり忙しくなった。というのは年中行事のほかに、小島烏水・岡野金次郎・木暮理太郎の生誕百年記念の「近代登山の先駆者たち」展（昭和四十八年十二月、丸善）を企画したこと、それにつづいて創立七十周年記念出版の『覆刻日本の山岳名著』（全十八点、五十年十二月、大修館書店）の編集などが具体化したためであった。そのようなとき小林さんは病床にありながら、あたたかな援助を惜しまれなかった。

ある日、聖蹟桜ケ丘へ山崎安治氏といっしょに仕事の相談に上ったとき、山崎さんには英国の第一次エベレスト隊のベリー隊長の手紙、富士山の錦絵を、私には窪田空穂の山の歌の書、丸山晩霞の絵を下さったが、それは後進への形見だったとおもえてならない。厚木市七沢の病院に入られてからは、山崎氏と同行してお見舞かたがた、覆刻の仕事の経過報告に上ったことがあった。このころすでに言語障害におかされていたのだが、小林さんは渾身の力をふるって、かそやかな声でつぎのように言われた。

「わたしの本は、大切にあつかってくれる人のところへ、まとまっておさまると、いいとおもいます」

その蔵書「高嶺文庫」は京都の小谷隆一氏の書庫に収められたが、『高山深谷』だけは亡くなるまで小林さんの枕頭におかれていたのである。

（つづく）

エーデルワイスにひとこと

久合田　弘

この植物ほど憧憬と幻想に満ち、しかも誤った認識をもたれているものも少ないかも知れない。特に山関係の情報の中に、そのことは多いようだ。この会報の中でさえ幾度も目にし、そのたびに何かいいたい思いはあったのだが、ちょうど会報五百号に投稿歓迎の一文を見て、やっとペンをとる気になった。

もともとヨーロッパ大陸には菊科の植物は比較的少なく、それらの多くは第四紀の氷河時代にアジア方面から移動したものともいわれている。菊科ウスユキソウ（Leontopodium）属の一種エーデルワイスも、もとはアジア方面から移動していったものとも考えられている。もっとも移動といっても、動物のそれとは異なり、植生地域が何百年という悠久の時の流れの中で次第に西方へ移動したのである。そしてその間に受けた苛酷な環境の影響は、そのウスユキソウをして、かつてのアジア時代の仲間のウスユキソウとは種を異にしてしまったのだった。それがいわゆるエーデルワイスなのである。

ところでヨーロッパにおけるウ

図書紹介

る。

一部八百円、日本ネパール協会、または日本山岳会科学研究委員会あて申込んで下されば郵送致します。

（高橋　詢）

PERU ANDES '84

児玉　茂著

一九八四年夏、早稲田大学山岳部がペルー・アンデス山域で合宿を行なったことは、会報四七四号で報告されている。この本の著者は、このときOBとして参加し、独自に学術調査を行ない、それをまとめてこの本とした。

今から九年ほど前、アメリカ山岳会のジョン・リッカーは、「Yuraq Janka（白い氷）」というペルー・アンデス案内書を出しているが、彼はそこで、コルディエラ・ブランカの美を守るため、未踏峰や未登ルートについての記述は、あえて載せなかった、と書いている。このような当山域の開拓者の姿勢と、日本からの距離の遠さも手伝って、近頃では、南米での登山活動がニュースとなることは殆どなくなった。

そのような情況のなかで、著者は遠征から戻り、二年もかけて、この本をまとめあげた。

内容はペルー・アンデスをめぐる歴史（登山史も含む）、地理、動植物についてなど広範にわたり、さらにその記述の因ってくる根拠を詳細に示し、筆をすすめている。このため、できあがった本書は、学術書ともいえる体裁をなしている。

さらに、かつて日本人開拓団が入りこんでいたプエルト・マルドナードでは、日本語を忘れた愛媛県出身らしい老人に話し掛けられたと、さりげなく書いているところがあり、人の世の無常を訴える筆者の姿勢もうかがえる。

この本は、ペルー・アンデスに関する本の中で、好著に属するものと思う。

一九八六年九月二十三日
Sea-Gale　発行　九〇ページ
折込地図一　図版一　非売品

（岡沢祐吉）

図書紹介

スユキソウはこのエーデルワイス、学名レオントポディウム・アルピナム（Leontopodium alpinum）の一種であるという。もっとも今一種アペニンやドロミテなどで稀に見つかるレオントポディウム・ニバレ（Leontopodium nivale）をうんぬんする人もあるが、これは前者が生育環境によって倭小化したものとの見方が有力なようである。

このレオントポディウム・アルピナムに当てられた俗名は私が調査した限りでも、エーデルワイスを含めて三十数個を数えた。それらがヨーロッパの国や地方や時代の変化に伴って様々に用いられてきたのである。

ところでこの植物はもともと薬草であり、ルールクロイテル（Ruhrkräuter 赤痢草）などとそのことを示す名前も多い。チロル地方でも、古くから薬草として盛んに用いられ、特に乳牛用薬草の中に、この草も入っていた。そして十八世紀前後この草とよく一緒に用いられていた薬草にヨモギ属のエーデルラウテ（Edelraute）というのもあったのだが、これと同じ程度の高度のアルプスに、よく一緒に生えていたし、よく外観も似ていたので、まねてエーデルワイスとよばれだしたのがもとだという。ようするにこの植物の名、エーデルワイスはロマン主義時代の十八世紀の中頃から、チロル地方で用いられだしたといわれる。エーデルワイス（Edelweiss 気品の白）という名前がよくその草の実態をあらわしていたので、間もなく他のドイツ語圏にも広まり、次第に全ヨーロッパ的になっていった。この花の特徴は不凋花、いわゆるしぼまない花であり、清純な白色であり、また別名エトワール・デ・ザルプ（étoile des Alpes アルプスの星）ともいわれるように、可憐な星形であるなど、いくたの点でめでられ、アルプスの花の代表と珍重され、ついに愛の花的位置を占めるようになっていった。

こうしてこの花への関心が高まるにつれて、この花への希求が強烈なものとなり、ついにエーデルワイス産業がおこり、保護法の制定も時機を失って、激減の一途をたどったのである。今日ではその自然の花を見ることは、通常の旅行者では殆んど不可能になってしまった。もっとも商品化された栽培エーデルワイスは、ヨーロッパのアルプスのいたるところで販売されてはいるが。

現在のところ、ウスユキソウは日本では六、七種あり、全世界では三、四十種といわれるが、エーデルワイスはヨーロッパ以外では発見されていない。にもかかわらず日本や中国やヒマラヤなどの山の情報の中に、よく間違ってエーデルワイスが出てくる。このことはヨーロッパコンプレックスの一例のように思われる。日本でいえば、それはミヤマ・ウスユキソウであり、ハヤチネ・ウスユキソウではありえても、アルプス・ウスユキソウすなわちエーデルワイスではありえないのである。エーデルワイスはウスユキソウだが、ウスユキソウはエーデルワイスではないのである。

東西南北

チョーチンと針

木村　俊博

中国語で手足のつることをチョーチンという。漢字で書けば「抽筋」であろうか。先日生れて始めてこの抽筋を経験した。その日は師大山岳部の例会で「筆架山」という台北郊外の日帰りハイク。私も誘われて、一カ月後の「玉山」山行の足慣らしにもと参加したのだが、湿った沢筋の岩道で、若い連中の足に合わせようと無理をしたせいもあるが、七合目辺りの急登で突然キューンとふくらはぎの筋がつり一瞬立ち止ったらもう痛くて歩けない。もんだり、叩いたりしてみるが如何ともならず、学生の肩を借りて、ようよう八合目の小屋に辿りついたが、日本山岳会員の看板の手前、恥しいやら痛いやら、日頃の精進の悪さを、この時ほど後悔したことはない。

こんな体たらくでは四〇〇〇メートルの「玉山」登頂など思いもよらぬと不安になり、八方手をつくし、↖

◎502号会報掲載の博物館を考える会が作成したリスト（つづき）

表B　大町山岳博物館保管資料（1）

番号	品名（題名）	作者・撮影者・使用者・編集者	種類・大きさ ヶ数	受入年月日	寄贈者
200	チョモランマ		パネル写真カラー 1	69. 9. 1.	
201	秩父宮殿下肖像		写真モノクロ 1		
253	エルク型ピッケル	高頭仁兵衛	（日本製） 1		
254	ピッケル	鹿子木員信	1		
255	アイスアックス	周布光兼	1		
256	ピッケル	中国側チョモランマ隊	1		
286	シュトック	武田久吉	1		武田久吉
287	スキー	〃	1双		〃
288	金剛杖	〃	1		〃
289	登山シャツ	〃	1		〃
290	携帯用ランタン	〃	1		〃
291	脚絆（紺）	〃	1		〃
292	写真用三脚	〃	1		〃
293	登山記念焼印板	〃	3		〃
294	カメラ（ボックスケース入）	〃	1		〃
295	スキー靴	〃	1足		〃
296	小田原提灯	〃	1		〃
297	敷皮	〃	1		〃
298	ミゴハバキ	〃	1		〃
299	ガマハバキ	〃	1		〃
300	弁当行李	〃	1		〃
301	下駄	〃	1足		〃
302	リュックサック	〃	1		〃
303	撮影用スライド	〃	25枚		〃
304	タークバッグ	〃	1		〃
305	飯盒	〃	1		〃
306	輪かんじき	上条嘉門次	1足		
362	富士登山資料	武田久吉	500点		武田久吉
456	皆香園寄せ書	昔を偲ぶ会	1		
148	チベット経典文	（金泥文字）	額入 1		深田久弥
150	ロンブクよりエベレスト 1924		1		
		H.Somervel	版画 1		
225	河口慧海肖像		額入写真 1	昭 5	
243	ヘスラー ピッケル	上田哲農	1	60. 8. 14.	上田しのぶ
245	シェンク ピッケル	板倉勝宣・槇有恒旧蔵（シャフトは戦後）	1	60. 12. 1.	板倉勝正

↙ない知恵をしぼった結果、台北一の名医という針灸医の孫先生を紹介して貰った。治療は三時間ほどかかり、費用は得体の知れぬ丸薬とも一万円、これまた私にとって生れて始めての経験であった。

名医の針が効いたか、それとも、とってつけたように始めたジョギングのせいか、はたまた、秘かにポケットに忍ばせた飲料のお陰か、いずれにしても後日の「玉山」登行は終始先頭をきる快調の歩度であったことを報告する。

（在台湾）

新入会員オリエンテーションに参加して

小寺佳美

入会が許されて会報「山」を読んでいると「ルーム」が気になりだした。単に集会室だけのことでなくそれも含めた、いわゆる日本山岳会本部をルームと称するのだろうと思われた。そのルームなる場をひと目見たいと思う。まもなくして新入会員オリエンテーションがルームで開かれると案内を受ける。新入りの一回きりのこの期を逃がしてはルームへ出向くことは今の所考えられない。新入りだからこそと出席に決めた。いよいよ明日がという前日、こんなことに尼崎からはるばる行っていいものかと考えてしまう。がこと山に関しては甘く許したい。

あれだろうと思う建物に近づくと、日本山岳会という木の札があった。やっと辿り着いた私には山での道標のようだ。五文字を目にとどめ進むと入口、署名して、座る、あっけなくルームの中に居た。じっと座って、目を往復させる。山の絵、山の写真、あの隅っこのうず高いのはもうすぐ取りこわされるはずの、バックナンバーの山だろうか。

しばらくして会が始まった。関西から馳けつけて下さった今西会長の歓迎の言葉、ここでは学歴や地位仕事も離れ山仲間としての集りだと。日本山岳会について、また組織と活動については松田評議員と高遠理事よりのお話を聞く。会費のことが何度か遠慮がちに話される。高いと云う声と安いと云う人もあると、地方では支部もあるので会費を払うだけでは淋しい、クラブライフに心掛けて欲しいと呼びかけられる。

80周年記念のスライドを見、次は二組に分かれ自己紹介と意見交換へとプログラムは進む。それぞれの地で活躍され多くの山の経験を聞くと、私はまだ幼稚園児だ。図書室も見せて頂く。会員には自由に見ることの出来る山の本は日本一の数を誇ると。

つづいて懇親会へともてなして下さる。先程の集会室中央のテーブルにはビールが用意されていた。折から上京中の西沢熊本支部長の音頭で乾杯。

このあたりからルームの持味が出てきたように思う。今、買物に行っていますのでとの間をもってくれたのは、千葉県からの参加者差し入れのナンキン豆だ。むいた皮が倍のかさになり、話もはずむ。ボトルがデンと置かれ水わり用の、すすけたやかんも並ぶ。手づかみで入れるカチワリ氷は、中華どんぶりに入れられていた。これらはまさに山の集いならではのことだ。見たかった行きたかったルームで、私には山が見えた。今ここに居ることが、この上もなく贅沢なことに思えた。私の他にも宮城、愛知、京都、熊本と、遠くから参加された方々が居られたが、皆さんも同じ気持ちであっただろうと思う。

またたく間に時間が過ぎ、歌を唄って閉会となる。お世話下さった方々に厚く御礼申し上げます。

表B　大町山岳博物館保管資料（2）

番号	品名（題名）	作者・撮影者・使用者・編集者	種類・大きさ ヶ数	受入年月日	寄贈者
248	ｱｯｼｪﾝﾌﾞﾙﾝﾅｰ型ﾋﾟｯｹﾙ		1		三枝守博
251	扇型門田ﾋﾟｯｹﾙ	上田哲農	1	60. 8.31.	上田しのぶ
257	＃571 山内ﾋﾟｯｹﾙ	小谷部全助（昭和８年頃作）	1	61. 3.17.	望月達夫
259	門田ﾋﾟｯｹﾙ頭部（試作品）				
		門田茂作（昭和初期）	1	61. 9.18.	平柳一郎
272	門田 1号ｱｲｾﾝ	（無銘）	1足	60.10. 1.	和久田弘一
354	輪かんじき	佐伯利雄作	1足	56. 9.	原田幹市
530	秩父宮殿下肖像	ﾖｰﾛｯﾊﾟにて	写真 1	大正 9.	松方三郎
531	槇　有恒　〃	ｸﾞﾘﾝﾃﾞﾙﾜﾙﾄにて（大10）	〃 1	〃	〃
532	〃　〃	〃	〃 1	〃	〃
533	〃　〃	〃	〃 1	〃	〃
534	秩父宮殿下肖像	北ｱﾙﾌﾟｽにて	〃 1	〃	〃
536	革のﾁｮｯｷ	ｱｲｶﾞｰにて槇氏使用	1	59.11.26.	佐藤久一朗
537	毛糸靴下	〃　〃	1	〃	〃
538	ﾊｲﾌﾞ	ｱﾙﾊﾟｰｸにて　〃	1	〃	〃
539	ｻﾞｯｸ	ﾏﾅｽﾙにて　〃	1	〃	〃
540	ｱｲｾﾝ	〃　田口氏使用	1	59. 9.24.	田口二郎
541	ｱﾉﾗｯｸ	〃　〃	1	〃	〃
542	羽毛ｽﾎﾞﾝ	〃　〃	1	〃	〃
543	ｵｰﾊﾞｰｽﾎﾞﾝ	〃　〃	1	〃	〃
544	ﾙｯｸｻﾞｯｸ	〃　〃	1	〃	〃
545	皮手袋	ﾏﾅｽﾙ隊	1双	52. 9.24.	辰沼広吉
546	防寒帽	〃	1	〃	〃
547	ｵｰﾊﾞｰ手袋	〃	1双	〃	〃
548	内靴	〃	1双	〃	〃
549	防寒帽	〃	1	〃	今西寿雄
553	ｽｷｰ（単板）ﾌｨｯﾄﾌｪﾙﾄ				
		太田篤	1台		
554	ｽｷｰ（合板）ｽﾄｯｸ付（ｶﾝﾀﾞﾊｰ）		1台		
555	ｽｷｰ（合板）ｽﾄｯｸ，ｼｰﾙ付		1台		
556	ｽｷｰ（単板）長210cm，ﾋｯｺﾘｰ，ﾌｨｯﾄﾌｪﾙﾄ				
	後ｶﾝﾀﾞﾊｰ	山口一孝	1台	62. 2.20.	山口一孝
355	飯盒	ﾏﾅｽﾙ隊	1		
486	槇氏肖像	ﾏﾅｽﾙにて	写真 1		
487	ﾅﾝﾀﾞｺｯﾄ		〃 1		堀田弥一
488	ｴﾍﾞﾚｽﾄ，ﾛｰﾂｪ（ﾌﾟﾓﾘより）		〃 1		

故片山全平氏の遺灰ヒマラヤへ

長年会報編集委員の一人として海外登山情報を適確にご報告頂いておりました故片山全平氏のご遺灰の少量が二月中旬、奥様と二人の娘さんとともにネパール入り。

ご家族とヒマラヤトレッキングを楽しみにしておられた氏のご遺志をつぎ、ご家族三人はエベレスト方面をトレッキングし、氏も宿泊した縁りのホテル、エベレスト

・ビューに立寄られ、ヒマラヤの絶景を見渡せるテラスから、好きな山に登れるようにとその遺灰を山に向かって撒いてこられた由。春夏秋冬、秀峰を眺めることのできる幸せ者の報告です。　合掌

（南井英弘）

五〇〇号座談会記事を読んで

望月　計市

「山」の編集のご苦労に対しては心から感謝し敬意を表します。

「山」にこんなことを掲載していただけたらと思う点を箇条書きにしてみました。

一、委員会、地方支部の山行計画で一般会員も参加可能のものは、もっとたくさん掲載してください。

一、地方の著名な山、紹介したい山、話題の山の情報（登山道、林道の利用方法、花の開花時期、宿泊場所、幕営地等）

一、図書の紹介は続けて欲しい。また受入図書の中で非売品については印をして下さい。（希望図書があった場合ルームに問い合わせをすればわかるようにして下さい）。

一、数ある委員会……どのような委員会がどのような活動をしているのか、一度、紹介していただけませんか、また委員会の活動の結果、一般会員に役立つものがあれば発表していただいたり、地方の会員に協力出来る事柄があれば要望したら如何でしょうか。

例えば「自然保護」についても、会員が日頃出来る自然保護をもっと具体的に指導するとか、支部または会員が加盟している団体が主催出来る自然保護のPR展などの資料（写真、パネル、パンフレット等）を作製し貸出し配布をするなど委員会活動の輪を拡げたら如何かと思いますが。

ともあれ地方会員がもっと積極的に活用、参加の出来る「山」としていただきたいと希望します。

山岳写真の源流展開催

日本山岳会後援

日本の登山と写真の黎明期に活躍した先人の貴重な作品を集めた写真展が日本山岳会の後援で開かれる。

河野齢蔵、志村烏嶺、辻本満丸、石崎光瑶、武田久吉、冠松次郎、穂刈三寿雄、田中薫と、いずれも日本山岳会草創期、あるいは飛騨・信州の高山の開拓期に活躍した人々の作品。ガラス乾板など奇跡的に保存されていた当時の写真80点を復元・展示する。他にイタリアの世界的山岳写真家ヴィットリオ・セラの写真40点も。

会場と会期

5月29日～6月3日　名古屋市ワキタ・ギャラリー

7月3日～7月9日　東京銀座富士フォトサロン

報告　双六谷上流地域の国立公園編入の要望

自然保護委員会

中部山岳国立公園の黒部五郎岳、三俣蓮華岳、双六岳、笠岳などに囲まれた双六谷上流は、黒部川上流とともに、現在も原始渓谷の様相を残し、冠松次郎氏など山岳会の先輩にも縁の深い地域であるが、双六渓谷は発電用水資源として北陸電力で水利権を持ち、また流域周辺は国有林となっている関係からか、国立公園の指定から外されている。中部山岳の国立公園指定は、昭和十一年で、当時の風潮だった富国強兵思想の影響が考えられる。戦後は五年毎に見直しが行なわれているが、戦後四十年を経て、近代の自然保護や景観保全など、国立公園本来の思想にもとづく見直しが、なされていない。

最近、富山支部の若林支部長から、北陸電力が、有峰湖への取水ダム計画を内部で検討しているようだと、自然保護委員会に報告があり、双六谷上流の国立公園編入について、要望書提出の要請があ

要望書

昭和62年3月16日

国務大臣環境庁長官

稲村利幸殿

社団法人　日本山岳会

会長　今西寿雄

双六谷上流地域の中部山岳国立公園編入について

中部山岳国立公園の黒部五郎岳、三俣蓮華岳、双六岳、笠岳などに囲まれた双六谷上流は、黒部川上流上の廊下とともに同公園周辺でも、我が国に残された原始峡谷としても、景観上も最も優れた地域であり、また原生林帯としても、生態学的にも重要な地域となっております。

別紙のとおり、国土地理院の五万分の一地図の部分図で示した黒部五郎岳南西部2，291メートルのピーク、同じく1，984メートル・ピークから2，023．2メートルピーク、同じく黒部五郎岳南部2，424．8メートルのピークを結ぶ線の地域は、金木戸川、打込谷など、優れた峡谷と原生林に恵まれ、国立公園区域外ですが、中部山岳地域でも、特に景観が優れ、また環境的、防災上および学術的価値を併せもっております。

しかしながら、これらの原生林は国有林として、伐採のおそれがあり、また峡谷は戦前から発電用水資源として、電力会社（現在は北陸電力）が水利権を所有しているため、国立公園の指定外の関係から、将来開発のおそれがあります。

同地域の金木戸川下流には、すでに取水ダムが設けられておりますが、更に上流に電源開発の計画が検討されております。本来なら、この峡谷一帯は中部山岳国立公園として保全され、また同流域の原生林も、現状のまま水源保安林として確保されてこそ、中部山岳国立公園としての価値があるものと考えます。

以上により、中部山岳国立公園に隣接する双六谷上流を、中部国立公園に編入して戴きたく、関係官庁とご連絡のうえ、早急なるご措置と、何分のご回答を賜りますよう、宜しくお願いいたします。

ったので、三月十六日付で別項のとおり、環境庁長官あて、要望書を提出した。

山岳会から国見委員長、関塚、国立公園協会の池田氏（自然保護委員）が環境庁自然保護局に要望書を提出し、特に次の三点を申し入れた。

一、双六谷上流に人工構造物を造ると、周辺の山岳景観の自然美を損ない、中部山岳国立公園の価値が低くなる。現在黒部湖は観光名所となっているが、下の廊下や、立山、後立山の山岳としての自然景観を損っている。同じような過ちをおかすべきでない。

一、電力需要は伸びが鈍っており、水力発電は経済的に劣っている。生活用水の不足は、水のリサイクル、節約を考えるべきで、ダム建設による景観、自然破壊による損失は、将来に禍根を残す。

一、双六谷上流の天然林は、伐採および輸送に費用が嵩み、木材としての経済的価値は低い。水源保安林としての価値が高く、国立公園に編入して保全してこそ価値がある。

環境庁側は、国立公園の見直しは昭和五十九年に行なわれ、次は昭和六十四年になることのほか、関係官庁との折衝があるので、早急な回答は難しい、とのことであった。

なお、要望書は林野庁長官にも写しを提出したほか、並行して当会の松井岐阜支部長から岐阜県知事に、若林富山支部長から富山県知事、北陸電力に「国立公園編入」について協力方を要請しており、成り行きを注目したい。

（関塚貞亨）

講演会報告

高所登山における自己管理について

高所登山研究委員会

当委員会では、去る三月三十日夜、高橋和之氏（カモシカ同人）を講師に、「高所登山における自己管理について」をテーマにした講演会を開催した。

高橋氏は、一九七五年、ダウラギリⅣ峰の南面ルートからの初登頂を果し、以後、同々人隊の隊長として遠征を指揮して常に無事故で登頂に成功されている。

この、八三年のローツェ峰から、その冬のエベレストを経て、八六年冬のプモリ峰遠征に続く成功は、常に、遠征の計画段階でその登山で何を目指し何をやりたいかを隊員と共に考え、それを基点にして総ての実践にうつっていく。また、個人的にも決して無理せず、自分の能力の不足する部分は、計画の段階でそれを備えた隊

図書受入報告

図書委員会

昭和 61 年 12 月分受入図書

1. 大塚大著「北アルプスの湖沼」山と渓谷社 1986(版元寄贈)
2. 降籏義道著「降籏義道の実戦山スキー」山と渓谷社 1987（版元寄贈）
3. Japan Alpine Club "Glimpses of Japan" Kyoritsukenkyu Center 1984（今西寿雄氏寄贈）
4. 新田隆三著「雪崩の世界から 改訂増補版」古今書院 1986（著者寄贈）
5. 堀了平著「偉大なる獅子マサ・コン峰登頂」講談社 1986（京都大学山岳部寄贈）

1 月分受入図書

1. 藤平正夫著「今は風に語らしめよ」桂書房 昭和 61（著者寄贈）
2. 渡部智倶人著「マイカーで行く九州100山峰」葦書房 昭和 61（著者寄贈）
3. 川口陽之編「自然とともに」中田印刷出版社 昭和 61（多田繁次氏寄贈）
4. 梅沢俊著「日本の名峰3 日高・夕張・増毛」山と渓谷社 1987（版元寄贈）
5. 福岡まいづる山岳会編「まいづる 30」福岡まいづる山岳会 昭和 61（編者寄贈）
6. 日本ヒマラヤ協会編「HIMALAYA Ⅲ 1982～1984」日本ヒマラヤ協会 昭和 61（編者寄贈）
7. 堀込静編「深田久弥」日外アソシエーツ 1986（版元寄贈）
8. 今野岳志著「日本の名峰 17 荒川・赤石・聖岳」山と渓谷社 1987（版元寄贈）

（望月達夫氏寄贈 9～37）

9. 「世界山岳名著全集 全 13 巻」あかね書房 1966～1967
10. 深田久弥著「ヒマラヤの高峰 新編 全5巻」白水社 1983
11. 慶応義塾大学體育會山岳部編「登高行 XVII」慶応大学山岳部 1974
12. 北海道大学体育会山岳部編「北大山岳部々報8」北海道大学山岳部 1959
13. 日本山岳会学生部編「日本山岳会学生部年報 No. 1」日本山岳会 1963
14. 日本山岳会編「第1次第2次エベレスト偵察隊報告書」日本山岳会 1969
15. 日本山岳会編「1970 年エベレスト登山隊報告書（Ⅰ）（Ⅱ）」日本山岳会 1972
16. 風見武秀著「ネパールの山と人」山と渓谷社 1960
17. 薬師義美編「1965～66 年中部ネパール踏査報告」泊山岳会中部ネパール踏査隊 1966
18. 北海道山岳連盟編「プマリ・チッシュ登頂」北海道山岳連盟 1980
19. 向後元彦 石井一郎編「資料目録＝インド亜大陸」AMKAS 1971
20. ヒラリー，エドマンド ロウ，ジョージ著「エベレストの東」ベースボールマガジン社 1956
21. 平林克敏著「ヒマラヤ サイバル登頂」サンケイ新聞出版局 1964
22. 江上康著「アピ 悲劇と幸運の山」創元社 1961
23. ディレンフルト，G.O. 著「第三の極地」朋文堂 1956
24. ブール，ヘルマン著「八千米の上と下」朋文堂 1955
25. 向後元彦著「一人ぼっちのヒマラヤ」ベースボールマガジン社 1964
26. ボニントン，クリス著「地の果ての山々」時事通信社 1976
27. カシン，リカルド著「大岩壁の五十年」白水社 1983
28. カルピニ ルブルク著「中央アジア蒙古旅行記」桃源社 1965
29. 「現代世界ノンフィクション全集3」筑摩書房 1967
30. 本多勝一 藤木高嶺著「カナダ・エスキモー」朝日新聞社 1963
31. 船田三郎著「岩登」目黒書店 1930
32. 金坂一郎著「冬山技術セミナー」山と渓谷社 1960
33. 山と渓谷社編「登山講座別巻山岳事典」山と渓谷社 1960

（次ページへ続く）

34．ピティ，R著「山地地理学」農林協会　1956
35．岩稜会編「穂高の岩場」朋文堂　1959
36．串田孫一編「山のABC」創文社　1959
37．独標登高会編「年報独標1」独標登高会　1959

員を選び、十分に評価しながら使う方法をとった結果であろうとのことであった。

また、一九八五年には、パミール・キャンプに参加して、コルジェネフスカヤ、コミュニズム、レーニンの三峰に連続登頂されたことに関連した話で、先ず第一には、精神的負担がなかったこと、また、自分の高所順応のパターンがつかめて、決して先走りをしないようコントロールに努めたことが優れた成果につながったとのことであった。

その他いくつかの話題の中でも、高所での登山行動中の呼吸法についてのそれは興味深いものであった。

参会者は約三十名。講演終了後懇親会を行なった。それにしても、若い会員の出席がほとんどないというのは、主催者として、期待しているだけに残念なことである。

（松永敏郎）

ニュージランド・国際キャンプ登山隊報告

青年懇談会

去る三月一日より二週間に渡って、マウントクック周辺で第一回国際キャンプが開催されました。

私達日本山岳会からは青年懇談会の学生三名（隊長小畑、安藤、堀）が参加し、海外の登山家達との交流を通して登山以外にも非常に得難い経験をしました。

私達三名は二月下旬にニュージランドに到着し、ノーマン・ハーディさんのお世話で登山の準備を整えました。三月一日、アウインハットでのキャンプ開会式は、ヒラリー卿の祝電なども披露され、盛大なものとなりました。キャンプには世界十三カ国より約五十名の参加者があり、様々な国の人々が登山という目的のために一同に会したわけです。その後、各国分散し私達はプラトーハットを拠点に周辺の山を登攀しました。入山中はあまり天候に恵まれなかったために登頂できたのはディクソンとクックの二山です。ディクソンの南稜は手強く緊張した登攀で、一方クックは五カ国二十名の同時アタックで順番待ちの大賑わい、どちらも日本では味わえないクライミングで充実した登山でした。私達三名は氷河の山の経験はなかったのですが、ニュージランド山岳会が装備その他ルート概要などあらゆる面でサポートして下さったので、鮮やかに輝く氷河の山々を楽しむことが出来ました。

三月十五日、ニュージランド山岳会々長リチャード・ピアソン氏より参加者へプレゼントがあり、一人一人と堅い握手をかわして、キャンプの全日程を終了しました。

（ニュージランド・国際キャンプ登山隊・小畑　修）

会務報告

三月理事会

3月11日午後6時30分
場所　本会ルーム

出席者　今西会長、山田副会長、鴨原、橋本、松永、大橋、梅野、高遠、鈴木、岡沢、太田、大森、平井、関塚各理事、松田、宮下、山口各評議員

委任　大塚副会長、浜口、絹川各理事、山本監事

審議事項

◎昭和六十二年度事業計画（案）　原案承認
承認の件

◎昭和六十二年度収支予算（案）　原案承認
承認の件

◎総会開催日の件
昭和六十二年五月二十二日午後六時、私学会館で行なう　承認

◎三国合同登山委員会メンバー、募金委員会メンバーについて　承認

報告事項

◎委員会報告　各委員会より報告

●山研四月二十六日オープン

●双六谷地域の国立公園編入要望書を環境庁に三月十六日提出

（3月）

2日　博物館を考える会
3日　婦懇セミナー

9日　総務委員会
10日　婦人懇談会
11日　理事会
14日　新入会員オリエンテーション
16日　図書委員会
17日　財務委、海外委、婦懇、自然保護委
18日　山研委員会
19日　総務委員会
24日　スライド映写会（自然保護）
26日　会報委、フィルム委員会
27日　科学委員会
28日　山岳史懇談会
30日　高所登山委講演会、博物館を考える会
31日　総務委員会

☎ 234-6659
この電話でもお知らせしています

◉火山についての講演会と探索山行

◎講演会
六十二年六月二十六日（金）
午後七時より、
本会ルームにて
講師　気象庁地震火山部、澤田可洋氏
演題　火山の活動と火山災害―火山の観測と活動予知、山歩きの注意、その他

◎探索山行
六十二年七月十八日（土）
―十九日（日）。
行き先　吾妻山群の吾妻小富士、一切経山の噴気地帯
講師　澤田可洋氏
探索現地講義＝火山観測の仕方、火山の表面現象、登山中に注意すべき前兆現象、その他

◇探索山行は六月二十六日までにハガキで、日本山岳会科学委員会あてお申込み下さい。
◇六十二年七月十八日（土）午前一〇・〇〇国鉄福島駅西出口（新幹線口）集合、マイクロバスで新野地温泉相模屋旅館へ。昼食後、鬼面山登山、相模屋泊。七月十九日（日）　バスで浄土平へ。探索山行の後、路線バスで午後五時頃福島駅着、解散。
◇費用　十八日の昼食と十九日の昼弁当を含め、交通費別で凡そ九千円程度の見込み。
◇相模屋旅館は、〒九六〇―二一福島市土湯温泉町野地二
☎　〇二四二―六四―三六二四
◇申込み後、とり消しは七月十一日までに願います。それ以後不参加の方は三千円お払い下さい。

＊

◉第41回ウェストン祭のご案内

イ記念山行
六月六日（土）午前六時
島々宿出発
徳本峠越え　上高地入り
ロ碑前祭
六月七日（日）午前十時より
上高地ウェストン碑前
恒例のウェストン祭は第四十一回を迎えることになりました。
先人ウェストン師を偲び、登山や、この素晴しい自然を讃える岳人の祭りです。新緑の上高地を味い、峠越えの記念山行をお楽しみ下さい。
ご参加をお待ち申し上げます。
信濃支部
ウェストン祭実行委員会

＊

◉第七回日本登山医学シンポジウム開催

表記のシンポジウムが左記の要領で開催されます。この会は、登山医学に興味のある登山者全てが参加出来ます。講演に際しては、医学用語を出来るだけ避け、平易な日本語を使うことが要求されておりますので、話の内容は理解しやすいと思います。多数の会員の参加を希望し、六月の京都路を楽しんで下さるようお願いいたします。

記

会長　斉藤惇生

会期　六月十三日（土）午後一時より、十四日（日）午前中
会場　京都ロイヤルホテル
京都市中京区河原町通三条上ル
参加費　会場費　三千円、懇親会費　五千円（十三日夜）
特別企画　パネルディスカッション「死線を越えて―体験サバイバル論」…自分は如何にして死線を乗り越えて山から帰って来ることが出来たか、という体験談を中心に、それを医学的に解明してみよう。…という企画
この企画に関しては、一般の体験発表を募ります。ハガキに盛り込める範囲内でその概要を書いて申し込んで下さい。採否はその内容の優劣ではなく、登山医学的見地からのバランスを考えて決めたいと思いますので会長にご一任下さい。
本シンポジウムに関する問合せ先
中島道郎　京都市中京区壬生東高田町一―二。京都市立病院呼吸器科、電話〇七五―三一一―五三一一。
医療委員会・浜口欣一

会員異動

退会
大橋喜治（五六三四）
原　修（七五八二）
大津幹夫（八一〇四）
飯田康子（八三一〇）
葛山朝三（八八三五）

物故
山口道弘（九三七一）　2・18
内山　広（九〇一九）　3・11
藤原武夫（五二三九）　3・21
中屋健弐（一二四七）　3・28

編集後記　五月の連休、「あずさ1号」を待つ新宿駅でのこと。▼私の前にいた、黄色いクラブ旗を持った一人と、腕にWVのマークを付けた一人は、乗車開始とともに、遅れてきた仲間、十～二十人のために、次々と座席にザック、ハンケチなどを置き、座席の確保にかかった。▼昭和二十三年、モラルの最低基準として軽犯罪法ができたが、この恥辱的法律を成立させた当時の殺伐とした時代を思わせた。▼会員諸氏はこの法律を読んだことがおありだろうか。（O）

昭和六十二年五月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　今西寿雄
編集代表　岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座　東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一―三―六
赤坂グレースビル
印刷所　株式会社　技報堂